



ちよっとお茶にしませんか

第12話

## 鉄好人海外行

### お祭りと民族衣装

山本誠志

Masashi Yamamoto

日科情報株式会社 (元) 住友金属工業 (株)

旅行中に、その地方の冠婚葬祭に出会うこともあります。お慶びの行事かお悔やみの行事かわからないときもあります。世界は実にさまざまです。その国、その民族によって、冠婚葬祭も一様ではありません。

しかし、共通点があります。そのときの衣装です。どこの地方でも、冠婚葬祭には、その地方の伝統的な衣装を着ることです。絵葉書やパンフレットなどでみる衣装です。日本であれば、羽織・袴や裾模様の着物です。世界的に有名な〇〇カーニバルや△△フェスティバルなどでは、ショービジネス的な衣装にエスカレートしていてケバイですが、地方で目にする衣装には、代々受け継いできた趣きがあります。その姿は、その地方の気候や風景に溶け込んでいます。いや、その気候や環境がその民族衣装を生み出したのでしょうか。特に、民族衣装そのものを着ての日常生活には感激します。

海外でも、その地の民族衣装を着て記念写真を撮ってくれるところがあります。また、パーティでは、会場に入る前に仮装させられることもあります。私は積極的にトライします。結構、ひとだかりもしますが、臆することなくやっています。言葉は通じませんが、することはどこでも一緒です。遠巻きにみていた人たちも参加します。

ここでのポイントは、堂々とその地のひとになりきって、ポーズをとることです。写真の写りもよくなります。恥ずかしがったり、つまらないと思っていると、その気持ちが写真に反映します。その民族衣装を身につけることで、王様やお姫様、ヴァイキング、はたまた伝説のひとなど色々な人物の雰囲気を楽しめます。結構、舞台俳優になったような気分です。いや、俳優以上の気分です。だって、本物の衣装をつけて、本物の舞台に立っているのですから。

できあがった写真を肴に、地酒、地ビール、地ワインを飲

みながら、現地のひととの交流も始まります。短時間仕上げの写真の効用です。

また、大道画家にスケッチしてもらうのも、おもしろいですよ。顔の特徴を強調したタッチで大胆に描いてくれます。自分でも笑えます。ここで彼らに聞いてみました。描いてもらった絵に文句をいうひとはいないかと。その答えは、男はなるほどと納得して受け取るが、女性は必ずやこんな顔じゃないと文句をつけるとの由。いずれにしても、まわりのひとは、よく描けていると拍手していましたが。

しかし、そのときの民族衣装が似合ったからといって、日本に持ち帰って着ても、似合うとは限りません。むしろこんなはずではなかったというのが普通です。舞台が違うからです。これ、念のため。

パレードについて行くこともあります。でも、その趣旨が最後までわからないこともあります。後方からつま先立ってみていると、周りの現地の人たちが前へと場所を譲ってくれます。行列に入れと誘われることもあります。これも旅行者の特権でしょうか。ここでも地酒、地ビール、あるいは地ワインを飲みながら、話を聞かせてもらいます。でも、民話を理解するのは難しいものですね。歴史的背景や気候風土が身に付いていないからです。

こんな私が海外旅行するときの定番の服装とはいえば、紺のダブルのブレザーに、紺のズボンか替ズボンです。シャツは白と、カラーあるいはストライプです。ネクタイは二種類です。靴は茶色の紐付き一足です。これと薄物のベストです。たったこれだけで、長期間の公式およびプライベートの両方をこなしています。公式の場では、紺の上下、白シャツにネクタイを。プライベートでは、紺の上に替ズボン、カラーシャツにネクタイ着用か、ノーネクタイで。これだけで、TPOに対応できます。

旅行とはいえ、それなりの恰好をしておれば、ジーンズ・Tシャツ・スニーカー姿以上に楽しめます。ときには、現地旅行社の添乗員と間違われて、知らないひとがついて来こともあります。土産物屋でも、安くショッピングできることもあります。現地のとっておきの情報を教えてもらえることもあります。時間や地図をメモってもらいます。言葉は気にしません。しかし、メモと鉛筆はいつも持ち歩いています。書いてもらったメモをみせれば、確実にたどり着けるし、番外の楽しみも味わえます。食べ物もまた。

まさに、旅は衣装、世は情けです。